

言語的表現行動をめぐる実験的アプローチ： Referential Communication 研究の概観

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 功 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/47683

言語的表現行動をめぐる実験的アプローチ*

—Referential communication 研究の概観—

佐 藤 功

I

コミュニケーションとよばれる対人的相互交渉を通して、人は自己の体験世界を拡大・分化・統合・発展させ、変革してゆくことができる。コミュニケーション活動が、知覚・認知・思考・動機づけなど人間の認識行動の成就に重要な役割をはたしているという一般的な事実については、あらためて言及するまでもないであろう(佐藤 1966, 1967 a, 1967 b, 1968, 1972, 1973)。

日常のコミュニケーション活動は、一般に、「送り手」と「受け手」の役割が継続的に相互交換される力動的過程を通して進展していく。あるメッセージの取得者がいつまでも「受け手」の状態であるとは限らず、次いで、彼自身が「送り手」としての積極的な役割をにや場合も多い。このようなコミュニケーション過程のにない手の多様な力動的側面に注目し、認知的調整(cognitive tuning)という文脈から、実験的アプローチを試みたのは Zajonc(1960)であった。彼は、メッセージ取得者が、「聞き手」の役割をそのまま維持するよりは、逆に、「話し手」として他者に対する積極的構えをとろうとするとき、メッセージに関する認知構造がより精細に分化し体制化されることを見出した。その後、Cohen(1961)も、「話し手」の構えの導入によって、メッセージに関連した認知構造が内部的により一貫して体制化されることを明らかにした。このことは、われわれの日常的体験(たとえば、読書や講義・講演・ラジオ・テレビの視聴)や臨床的体験(カウンセリングにおけるクライアントとセラピスト間のコミュニケーション

ン行動)をかえりみれば充分うなづけることであろう。確かに、同じ知識や体験内容であっても、読みっぱなし、聞きっぱなし、見っぱなしにしておくよりも、その対象となっている事柄を、自分が、自分なりのコトバ(場合によってはコトバ以外のシンボル・メディアを含めて)を媒介にして、誰か相手(自己自身の場合も含む)に、話し・書き・描き表わしてみようと積極的に構え、その主体的・能動的な表現活動を実際にはじめるとき、まさにその事を通して、われわれの知識や体験は新たな意味を帯び、おのずと分化・統合に向かわざるを得ない(黒田 1959, 1968; 佐藤 1972)。単なる記憶的再生をこえて知識や体験が有機化・構造化していく過程には、本来的にこのようなモメントが含まれているように思われる。この文脈において考える限り、「言葉」を「思考」に従属させる見解をしりぞけ、「言葉」が「新しい思考」を生み出すことを積極的に表明する Merleau-Ponty(1960, 邦訳 1969)の次のような主張に、根源的な意味合いにおいて、筆者も同意する。「言語は思考の手段ないしは符号とされるとき破壊される。そのとき、個々の言葉(mots)がわれわれの内部にどれほど深くまで喰い込んでいるものか、また、考えるやいなや話をしたいという欲求や情念、自分にむかって話しかける必要が感じられてくるということ、また個々の言葉はさまざまな思考を呼び起こす力——以後取り除くことのできない思考のさまざまな拡がりや据え付ける力——をそなえており、われわれ自身自分でもできるとは知らなかった答を口先に用意させ、サルトルの言うように、われわれ自身の思考をわれわれに教えるということ、これらを理解する道が閉ざされてしまう。……表現の活動は、思考する言活動[言葉](parole

*昭和49年9月17日受理

pensante) と「活動をする〔言葉を話す〕思考 (pensée parlante) との間で営まれ、軽率に言われているように、思考と言語との間で営まれるのではない。」(邦訳, P. 23, P. 24。なお、傍点は筆者による)。

ところで、前述の「構え」の効果に関する結果は必ずしも一義的ではない。筆者の検討によれば (1970 a, 1970 b, 1970 c), メッセージの受け取り方や言及されている事象の認知は、予想される相手へのかかわり方 (構え) とメッセージ取得者自身の特性 (熟知度・関心度など) との交互作用に多く依存しており、「話し手」の積極的構えから生ずる独特なメッセージの特徴づけ作用と同時に、「聞き手」の構えから生ずる特異な対応反応 (一種のコミュニケーションへの抵抗を暗示するような) の存在も示唆された。

さらに、こうした「構え」の効果の検討に加えて、より重要なことは、実際のコミュニケーション過程における役割活動の効果についての実証的な跡づけであろう。そこで、筆者は、より限定された実験の場面において、その跡づけを試みようとした。その際さしあたって、Werner & Kaplan の著書 (1963, 邦訳 1974) が、参考にされた。というのは、特有の有機体論的—発達論的 (organismic—developmental) な観点からではあるにせよ、彼らが、「話し手」・「聞き手」・「対象 (referent)」・「シンボル・メディア」の4種のコンポーネント間の関係という基本的なコミュニケーション論的枠組をふまえて、視覚的 (多義的) 刺激の意味づけと言語化の過程を取り扱っているからである。彼らの研究についての筆者なりの紹介と論評は、すでになされているので、あらためて繰り返すことはしない (佐藤 1966)。筆者は、その後、次のようなシユマ (Fig. 1) を一応設定し、コミュニケーション論的枠組をふまえて、多義的図版の verbal encoding 過程をとらえる試

みを行なって来た。^{注1)} 実験と結果の吟味は現在続行中であり、今のところ、最終的な結果を明確化するまでには至っていない。

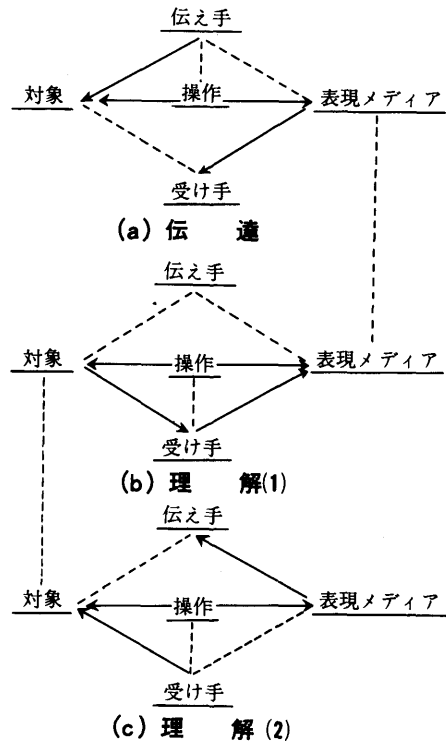


Fig.1 コミュニケーション過程における4コンポーネント間の関係

しかし、この種の問題を包括的に取り扱うためには、その理論的枠組と方法論のより深い検討とそれに基づく手続きや分析視点の洗練がなされねばならない。本稿において、筆者は、このような意図にそい、最近の referential communication をめぐる諸研究に着目し、以下、便宜的に次のように類別し概観してみようと思う。

A. 問題の探索的な諸研究

注1) これらの研究は、昭和46年度文部省科学研究費 (一般研究 (D)・課題番号 81560), および、昭和47年度文部省科学研究費 (一般研究 (D)・課題番号 761057) の補助をうけて行なわれたものであり、その一部は、日本心理学会第36回大会 (昭和47年), 東北心理学会第27回・新潟心理学会第10回合同大会 (昭和48年), 北陸心理学会第9回大会 (昭和49年), 日本社会心理学会第15回大会 (昭和49年) において、それぞれ発表された。

B. 問題の深化をめぐる諸研究

- a) 確率論的モデルによる吟味
- b) 発達の見地による一般的吟味
- c) 社会化過程との関連づけによる吟味
- d) 実験的訓練の効果に関する吟味

II

諸研究を概観する前に, verbal interaction の研究法のひとつとして近年用いられるようになったこの referential communication の研究にはほぼ共通な実験的パラダイムの基本的特質についてふれておこう。(1) 先づ, 「話し手」に, ある target referent (言及されるべき対象) を含む一組の素材が呈示される。この素材としては, 色, 幾何学的図形や新奇なグラフィック・デザイン, 多義的刺激, 人の表情写真, 単語などの言語的素材等, さまざまなものが用いられる。(2) 「聞き手」にもまた, 「話し手」に呈示されたのと同じの referent を含む一組の素材が与えられる。(3) 「聞き手」がこの一組の素材の中から言及されている「対象 (referent)」を同定 (identify) し得るように, 「話し手」は, その「対象」を言語という「シンボル・メディア」を媒介にして表現する。(verbal encoding process)。(4) 「話し手」からのこの言語的表現を手がかりにして, 「聞き手」は, 一組の素材の中から, 言及されている「対象 (referent)」を同定する。(decoding process)。(5) 言語的に表現されたもののみを聞き手側の手がかりにさせるため, 直接相手が見えないように, 通常, 「話し手」と「聞き手」の間は衝立などで遮蔽される。以上のように, このパラダイムには, 前述の Werner & Kaplan および筆者の研究シマに内在する4コンポネントが基本的に含まれていることがわかる。

さらに, この referential communication の研究に関連して, その先がけともみなし得るような研究の存在についても一言ふれておかねばならない。Werner らの著書(1963)に引用されている Kaplan (1952) や Slepian (1959) の研究

成果については, すでに紹介・論評がなされた (佐藤, 1966)。ここでは, その理論的・方法的意義について論究した Kaplan (1961) の論文, および, わが国において「伝え合い」という相互弁証法的な視点からのアプローチを積み重ねてきた, いぬい・うどう (かまやち) による「形象コミュニケーション」の研究 (1965) の重要性を指摘しておこう。一方, 言語的伝達・理解の発達の側面に関する実験的研究は, Cohen & Klein (1968) も指摘しているように, Piaget (1923, 改訂3版1948, 邦訳1954) によって——とくに, 子どもの思考と論理をめぐる研究の基礎づけともいえる形で——早くから着手されていたにもかかわらず, その後の言語発達の研究の焦点は, speech sounds の発達, 語いの増大, syntax の獲得, 概念形成・問題解決における言語の使用などのトピックスに限られ, コミュニケーション場面での言語の使用能力に関する実験的検討は比較的手薄になっていた。こうした状況のひとつは, Moscovici (1967, 1972) や Rommetveit (1968) および Carswell & Rommetveit (1971) も暗にふれているように, 従来の伝統的な言語の心理学研究者が, 主として比較的取りあげやすい側面に光をあて, communication settings という相互作用論的なダイナミックな見地からのアプローチを避けようとしてきた傾向を反映しているように思われる。しかしながら, このような一般的な状況の中で, とくに, わが国において, たとえば, Piaget の線にそって展開した波多野・辻・滝沢の研究 (1960, 1962) や「話し」・「聞く」機能を含めた小学生の言語能力の発達に関する実験的・実証的な総合研究 (国立国語研究所, 1964) の存在は特筆に値する。また, すでに1930年代になされた城戸の「文章の叙述と解釈の態度」等を含む一連の実験的・実証的な心理学研究 (城戸, 1970) は, 言語的相互作用と文化に関するダイナミックな視点からの深い示唆をわれわれに与えてくれる。上にあげた重要な諸文献についての詳細な論述は, 機会をあらためて行なうことにし,

本稿では、最近の研究に焦点をさだめ、その概略についてみていくことにしよう。

A. 問題の探索的な諸研究

Krauss & Weinheimer (1964) は、Fig. 2 に示されているような新奇な graphic figures のセットを素材にして成人を被験者にして実験を

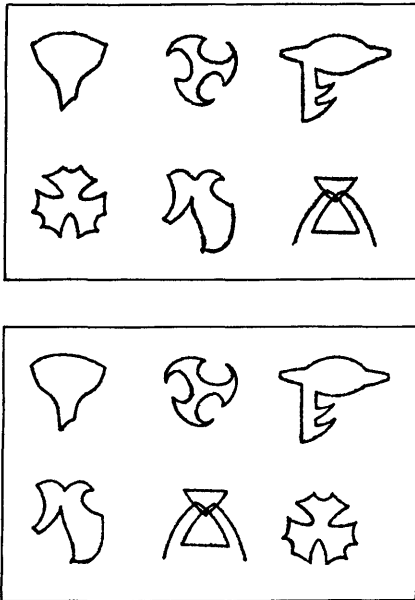


Fig.2 新奇な graphic figures の例 (Krauss & Weinheimer, 1964)

行なった。実験課題は、ペアになった「聞き手」が言及されている図形を identify し得るように、「話し手」が、一定の図形について言語的に表現することである。この課題は何試行にもわたって行なわれたが、その都度セットにされた図形の一部、またはその位置が変えられ、さらに言及されるべき対象図形の呈示頻度も図形によっていろいろに変えられた。実験の結果、あまり言及されない図形に対する言語表現 (reference phrase) に比べ、しばしば言及された場合には (つまり、social interaction がすすむにつれて)、当然のことながら、reference phrase は短くなった。(つまり、phrase の中に用いられる単語が少なくなったわけである)。

この場合、reference phrase は、多義的な新奇な図形を何かある familiar なものに関連づけようとする「話し手」の操作の過程で生じると考えられ、したがって、最初の言語表現は、いろいろと工夫を凝らす「話し手」の操作が加わり長くなるが、やがて、identify される回数が増えるにつれて、その言語表現は次第に簡略化され短くなると説明された。

次に、Krauss & Weinheimer (1966) は、前の実験では充分統制されていなかった「聞き手」からの反応フィード・バックのあり方に着目し、それと「話し手」のreference phrase の長さとの関連を追究しようとした。このフィード・バックの操作を除いて、実験手続は前と同じであり、被験者も成人が用いられた。フィード・バックは実験者によって artifact に操作され、それが「聞き手」の「反応」として「話し手」に与えられた。フィード・バックの変数としては、次の2種が区別され、実験デザインは、これら変数の組み合わせによって構成された。第1の変数は、“confirmation feedback” とよばれ、これは「聞き手」が課題を正しく遂行したかどうかに関する information の量のちがいである。すなわち、これには、試行を通じて “correct” という表示が100%なされる場合と50%なされる場合とがある。第2の変数は、“concurrent feedback” とよばれ、“correct” の表示の出現率にかかわらず、「話し手」の言語表現に対してその都度、「聞き手」からの何らかの言語反応 (たとえば、“エッ!”、“なるほど!”、“OK!” など) が与えられる場合 (この場合はCFとよばれる) と、全然与えられない場合 (この場合はNCFとよばれる) がある。結果は次の通りであった。一般的にみて継続的な試行の繰返しによって、reference phrase が短縮される傾向は先の結果と同様であったが、さらに注目すべきは、NCF群 (とくに confirmation 50%の場合) では、reference phrase がそれほど短くならなかったのに対して、CF群 (とくに confirmation 100%の場

合)で、reference phrase が著しく短くなったことである。こうして、試行が継時的に繰返される場合、とくに、「話し手」へのフィード・バックのあり方が重要である、と指摘された。

さらに、Krauss & Weinheimer (1967)は、言及されるべき対象 (referent) の codability という見地から実験を展開した。この場合、codability が高くなれば reference phrase は短くなり、codability が低ければ、reference phrase は比較的長くなるであろう、と仮定された。成人を被験者に、素材としてはカラー・チップ (Brown & Lenneberg (1954) によって使用されたもの) を用いて実験が行われた。なお、codability に影響を及ぼす操作的要因として、次の2つが取上げられた。①コミュニケーションのモード：すなわち、monologue 条件（「話し手」がテープに向かって独りで吹き込む場合）か dialogue 条件（「話し手」がペアになった相手に語る場合）か。②素材内の諸要素間の類似性 (similarity) : similar set (同一の色相で色調が4段階になっているもの) か dissimilar set (4色、すなわち色相そのものが異なっているもの) か。実験は以前と同じく継時的試行を通して行なわれた。なお、この実験においては、「monologue 条件より dialogue 条件のほうが、また、similar set より dissimilar set のほうが、referent の codability は高くなり、したがって、その reference phrase もより短くなるであろう」と仮定された。実験の結果、素材セットの類似性の主効果は、予想どおり有意であったが、コミュニケーション・モードの主効果に関しては、以前の実験とは素材の質が異なったためか、単なる傾向しか検出できなかった。しかし、素材セットの類似性とコミュニケーション・モードとの交互作用は有意であり、similar set と dissimilar set との間の reference phrase の長さの差異は、monologue 条件よりも dialogue 条件において著しかった。これらの結果については、後述の Rosenberg & Cohen (1964, 1966) の理論モデルと

関連づけて解釈がなされた。

この実験成果をふまえながら、さらに、コミュニケーション効率との関連を追究するため、以前に行われた Kaplan (1952) や Slepian (1959) の研究の発展という形で実験を試みたのは、Krauss, Vivekananthan & Weinheimer (1968) であった。この実験も、成人を被験者にし、カラー・チップを素材にして行なわれた。この場合、次のような仮説が設定された。「話し手」の encoding process における “inner speech” 条件と “external speech” 条件との差異は、「聞き手」の側のコミュニケーション効率（つまり、正確に identify できる度数、いいかえれば communication accuracy) の差異を引起すであろうし、また、「話し手」の言表する reference phrase の長さにも差異を生ぜしめるであろう。このような仮説の検証のため、encoding session において、被験者は、social 条件と non-social 条件とに2分された。この場合、social 条件とは、他人が後で聞くことになるという条件でテープに吹き込む、つまり、他人のためのコード化、いわば、external speech にあたり、non-social 条件とは、自分自身が後で聞くことになるという条件でテープに吹き込む、つまり、自分のためのコード化、いわば、inner speech にあたる。decoding session は、encoding session 終了の2週間後に行なわれたが、この session においては、全被験者は、① self-decoding (自分自身が以前に吹き込んだ reference phrase を用いて、色彩を identify する)、② other-social decoding (social encoding において他人が吹き込んだ reference phrase を用いて色彩を identify する)、③ other-non-social decoding (non-social encoding session において、他人が吹き込んだ reference phrase を用いて色彩を identify する) という3条件の実験全部を受けなければならなかった。(素材および reference phrase は、条件ごとに変えられた。)結果は次の通りであった。①コミュニケーション効率 (accuracy) :

最も効果的で正確な identification が得られたのは、「自分が吹き込んだ自己のためのコード」を用いたときであった。これは、ある意味で当然のことかも知れないが、とくに、英語で色の名前を表現するとき、conventional な言い方にもいろいろとヴァリエティがあり、したがって、他人の reference phrase を用いて、identify することはなかなか出来にくいと考えられる。なお、他人の reference phrase を用いた場合には、non-social encoding (その人自身のためのコード化) 条件よりも、social encoding (他人のためのコード化) 条件においてなされた言語表現を手がかりにする場合のほうが、コミュニケーション効率は高かった。② reference phrase の lexical な特質：reference phrase の長さに関しては、social と non-social との encoding における条件差は有意ではなく、予想に反して、Kaplan や Slepian の結果は確認されなかった。しかし、reference phrase の質に関しては、social encoding 条件よりも、non-social encoding 条件の下でのほうが、reference phrase に使用された単語は、ユニークで unusual (low-frequency) であった。これは、Kaplan や Slepian の結果と一致し、予想通りの結果であった。③ reference phrase の特質と decoding process との関係：先ず、social encoding 条件下での自分の言語表現を、decoding の際の手がかりとして自分で用いた場合、言語表現 (reference phrase) の unusual なユニークさ (low-frequency の単語使用) とその self-decoding の accuracy との間には、有意な逆相関 ($r = -.54, P < .05$) が見出された。いいかえれば、usual で、より common な (high-frequency の単語使用の) 言語表現を手がかりにするほど decoding の accuracy は高くなったわけである。次に、non-social encoding 条件下での自分の言語表現を、decoding の際の手がかりとして自分で用いた場合、その言語表現のユニークさと decoding の accuracy との間には、有意な正の

相関 ($r = .42, P < .05$) が見出された。つまり、自己のためのコードを decoding の際自分で使用する限り、ユニークな言語表現ほど、decoding の accuracy は高くなったのである。要するに、これらの結果から、2つの encoding 条件間に異なるプロセスの存在が推定されるわけで、とくに、social encoding (他人のためのコード化) 条件の下では、「話し手」が、何らかの意味で、「聞き手」の観点・視点・立場に (仮説的に) 立つ可能性が示唆される。

上述のような social encoding と self-encoding の条件をさらに詳細に吟味するため、Slepian の実験の比判的検討をふまえて、Danks (1970) は研究を企画した。被験者は成人、素材は、Krauss & Weinheimer (1964) の用いた新奇な graphic figures であった。実験は、encoding process としての第1 session とそれに続く decoding process としての第2 session とに分けて実施された。被験者は、次の5群に分けられた。第I群 (Soc)：第1 session において、“social” の教示の下に encoding (後で、他人が使用するためにコード化)。第II群 (Self)：第1 session において、“memorial” の教示の下に encoding (後で、自分が使用するためにコード化)。第III群 (AE)：第1 session において、“association” の教示の下に encoding (ただ思い浮ぶままにそのままコード化)。以上の3つの群の被験者には、実験開始前に一組の刺激素材が一応全部示された。第IV群 (AC)：第III群と同じく、第1 session において “association” の教示の下に encoding。ただし、第III群と異なるところは、あらかじめ刺激図形が示されていない点である。第V群：第1 session は行われず、第2 session のみ。次に、第2 session は、大部分の被験者 (90%) に対しては2週間後、残りの被験者 (10%) に対しては11~22日後に行なわれた。decoding に関する実験は、第I~第IV群まで同一で、次の3条件が課せられた。ただし、3条件の施行順序はカウンター・バランスされ

た。(a)自分自身が自分のために行った言語表現を手がかりに decoding する。(b)他の人が行なった言語表現を手がかりに decoding する。ただし、この場合の言語表現は、自分と同じ encoding 条件群のメンバーによって行なわれたものである。(c)他の人が行なった言語表現を手がかりに decoding する。ただし、この場合の言語表現は、自己の属する群以外の他の3群のうち、いずれかの群のメンバーによってなされたものである。なお、第V群の decoding の条件は、(b)、(c)が用いられ、(a)は省かれている。主要な結果は次の通りであった。①自分自身の言語表現を手がかりにして decoding した場合：correct number を指標にしてみると、大体において第III群(AE)、第IV群(AC)より、第II群(Self)、第I群(Soc)のほうが decoding の accuracy は高かった。さらに完全な decoding に関する得点づけの結果(number of perfect score)でまとめてみると、第II群(Self)は、他の3つの群(第I、第III、第IV群)より accuracy は著しく高く、とくに、第I群(Soc)よりも高い値を示したことは注目されよう。逆にいうと、たとえ Self 条件(自己のためのコード化)であっても、それは単に頭に浮んだままのコード化とは異なり、自分なりの editing (編集)なり modification (修正)なりが加えられているとみるべきであろう。②他人の言語表現を手がかりにして decoding した場合：correct number を指標にしてみると、第I群(Soc)、第II群(Self)の decoding accuracy は、第III群(AE)、第IV群(AC)にくらべ高かった。これは、Soc 条件、Self 条件とも encoding の際、ある意味において、initial associative response に後続して言語表現がなされるからとも考えられる。また、Self 条件と association 条件との間の結果の相違も、Self 条件におけるある種の editing を推定させる。なお、number of perfect score の結果では、Soc 条件と Self 条件との差はみられなかった。これは、Kraussら(1968)の結果と一致しないが、恐らく、素

材の相異によるものであろう。③言語表現の特質(内容)、コミュニケーション・モードと decoding accuracy との関係：しばしばあらわれる言語表現を modal とし、全体を通じて1回しかあらわれない言語表現を single とすると、single と modal の双方通じて、他者のためのコード化(other)よりも自己のためのコード化(own)において decoding accuracy は高く、また、own と other を通じて、single より modal のほうが、decoding accuracy は高かった。Danks は、これらの結果について、とくに、editing encodings と素材に対する conventional な level の有用性というコミュニケーション論的見地から考察を加えた。

以上の研究のほか、やや特殊な観点からではあるが、成人の被験者を用いての実験が若干みられる。たとえば、Alkire, Collum, Kaswan, & Love (1968) は、Krauss & Weinheimer (1964) の素材を用いて、とくにコミュニケーション過程に及ぼす集団内の社会的地位(status)の効果を検討した。女子学生のあるクラブのメンバーのうち、高一地位の者と低一地位の者が被験者にえられた。その結果、予想通り、低地位の「受け手」よりも、高地位の「受け手」のほうが、より useful な情報を得、また、より明確な質問を発する傾向のあることが確認された。とくに、地位の差が著しい場合、結果的に、高い地位の被験者は、低い地位の被験者よりも、decoding accuracy が高くなった。かくして、このような社会的地位の差異が、「送り手」によって伝えられる情報のタイプに影響を及ぼし、したがってまた、「受け手」の側の activity のレベルにも影響を与えることが明らかにされた。

また、Manis & van Rooijen (1973) は、表情写真を素材とし、従来の impression formation (印象形成)の研究と、この referential communication (とくに、その decoding process) とを関連づける新しい試みを行ない、referential message として呈示される情報

のintegration に関する理論的検討を行なった。

B. 問題の深化をめぐる諸研究

a) 確率論的モデルによる吟味

referential communication の当事者(「話し手」と「聞き手」)の内部に生じる心理的過程について、興味あるひとつの理論モデルを提出したのは、Rosenberg & Cohen (1966)である。もちろん、この理論の適用範囲等については、今のところ極めて制約されているが、ともかく、彼らがいわゆる言語連想の確率モデルから出発し、それを独自のコミュニケーション論にまで発展させた点は評価されてよい。彼らは、モデルの理論化にあたって、以前の研究(Rosenberg & Cohen, 1964)に基づき、次のように限定され

た実験的パラダイムを設定した。すなわち、素材としては、1系列の単語の対(大部分は synonym, たとえば, Woman—Lady)が用いられ、1試行1対ずつが呈示される。対にされた単語のうちいずれか片方が referent であり、他は nonreferent である。「話し手」の課題は、「聞き手」が対になった単語のいずれが referent であるかを決定(identify)し得るような手がかりを与えるために、ひとつの「新しい単語」(clue word)を言語的に表現することである。「聞き手」は、この「新しい単語」(clue word)を手がかりにして、referent を identify しなければならない。紙数の関係から詳細な記述は省略するが、彼らの理論モデルを示す次の図(Fig. 3)をもとに、ごく簡単に説明しておこう。図にみ

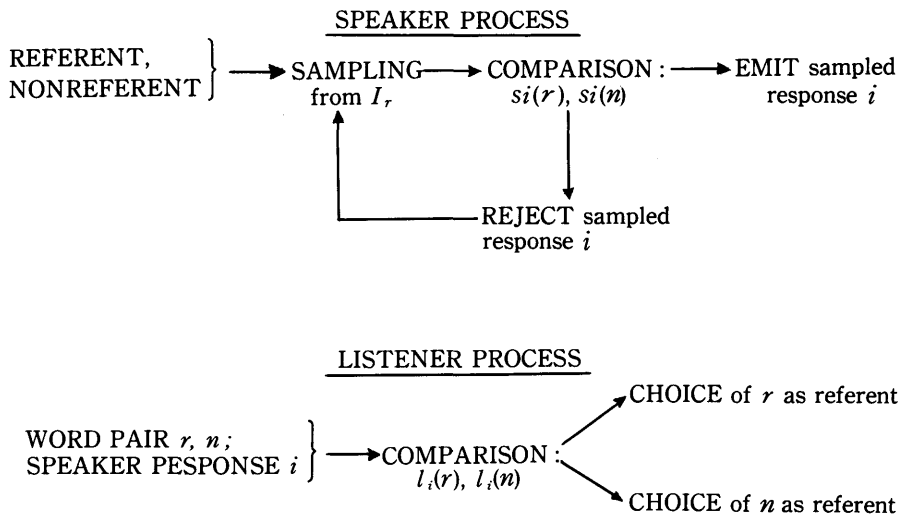


Fig. 3 Referential communication の確率論的モデル (Rosenberg & Cohen, 1966)

られるように、「話し手」の encoding 過程 (speaker process) は、基本的には“sampling”と“comparison”とよばれる2つの stage の連鎖からなっており、「聞き手」の decoding 過程としては、上記の“comparison”と similar なひとつの stage が想定されている。先ず、「話し手」の過程からみてみよう。① sampling stage: 最初、「話し手」は、referent としての

単語に対するある反応語をふっと思い浮べる。この場合、「話し手」のレパートリーの中で、とくに referent に対する語連想の確率的な distribution (I_r) から、ある語が内的にサンプリングされるわけである。② comparison stage: 次に、この内的に思い浮べられた反応 sampled response (i) と呈示されている対になった単語のそれぞれとの連合強度 (associative stren-

gth) が相対的に “比較” される。図中, $si(r)$ は referent word と sampled response(i) との「話し手」における連合強度であり, $si(n)$ は nonreferent word と sampled response(i) との「話し手」における連合強度である。こうして, $si(r)$ のほうが相対的に強ければ, コミュニケーションに適切と感じられて, sampled response(i) がはじめて言語表現として外化 (emit) される。もし, sampled response(i) がコミュニケーションに不適切と感じられた場合には, 外化 (emit) される前にそれはしりぞけられ (reject), あらためて, また sampling-comparison cycle が繰返される。こうして最終的に「話し手」は, ひとつの言語表現を外化 (emit) し, 「話し手」のプロセスは, ひとまず終結する。次に, 「聞き手」の過程である。すなわち, comparison stage: この場合は, 要するに, 「話し手」から言語表現された反応 (i) (つまり, clue word) と呈示されている対になった2つの単語の各々との確率的な連合の相対的強度 (relative associative strength) が, 「聞き手」において吟味される。図中, $li(r)$ は referent word と clue word(i) との「聞き手」における連合強度であり, $li(n)$ は nonreferent word と clue word との「聞き手」における連合強度である。こうして, その相対的な連合強度の大きさによって, 「聞き手」の choice (identify) がなされる。「聞き手」の側のこのようなプロセスは, 「話し手」の comparison stage と similar なわけであるが, 見方によれば, 逆に, 「話し手」の側の comparison stageこそ, Mead(1934) 流に言って, 「話し手」における「聞き手」の “役割取得 (role-taking)” なのだ, と考えられないこともない。

それはともかく, Cohen & Klein (1968) は, この確率論的枠組をふまえて, 児童における

referential communication の発達の様相をとらえる実験を試みた。被験者は, middle-class の elementary school の生徒で, 3年生 (8才児), 5年生 (10才児), 7年生 (12才児) であった。素材は1系列の単語の対であり, 実験は, Rosenberg & Cohen (1966) のパラダイムに基づいて行なわれた。その結果, decoding accuracy は, 学年水準が高まるにつれて増大することがわかった。すなわち, 年長児は, 「話し手」になった場合, より effective に clue word を発することができたし, 「聞き手」になった場合, たとえ low-frequency の clue word を手がかりにしても, その decoding accuracy は高かった。これに比べて, 年少児の成績は低かった。これらの結果は, 先の Rosenberg & Cohen の理論モデルと関連づけて解釈された。すなわち, 年少児では, 「話し手」の場合, レポートリーの幅がせまく, potential clue word を sampling する sets が限定されており, また comparison の stage も不徹底で, 不十分な水準において sampled response がそのまま外化 (emit) されやすい。一方, 「聞き手」になった場合でも, 一定の clue word と referent word, nonreferent との相対的な associative strength による比較判断が充分には行われない, と考えられた。

b) 発達の見地による一般的吟味

すでに, 子どもの言語的伝達・理解の機能に関する発達の研究が Piaget によってなされていたことは, 先に述べた。ところで, 最近, いわゆる role-taking と子どものコミュニケーションの能力の発達と関係づける Flavell らの研究 (1968)^{注2)} が刊行されたが, それと関連するような referential communication の発達の研究もいくつか存在する。

Glucksberg, Krauss & Weisberg (1966) は,

注2) これは, 下記の著作であるが, 今, 筆者の手元にはない。後述の Peterson, Danner & Flavell (1972) により, ここに引用した。

Flavell, J. H., Botkin, P. T., Fry, C. L., Wright, J. W., Jarvis, P. E. (1968) The development of role-taking and communication skills in children. Wiley.

Krauss & Weinheimer (1964) が用いた新奇な graphic figures を使用し、4～5 才の被験児に対して実験を行なった。条件のちがいで、実験は次の3群に分けて行われた。第1実験：「話し手」・「聞き手」のペアとして同年令の幼児同志が組み合わせられる場合。第2実験：成人によって encoding された言語表現 (reference phrase) を幼児に示し、それを手がかりにして幼児に decoding させる場合。第3実験：幼児に、自分自身が encoding した言語表現を手がかりに decoding させる場合。この実験から次のことが明らかにされた。①成人は、referent を言語的に表現する場合、相手に理解されやすいように elaborate し、editing し、したがって、その reference phrase は比較的長くなる。ところが、幼児は、自分にだけわかるその子独特の idiosyncratic な——いかえれば、自分の頭に浮んだそのままを生みの形で出すような——言語表現 (この場合、単語数が少くほとんど単なる命名にすぎない) をするという。②したがって、幼児同志をペアにしてなされた実験では、「話し手」としての幼児の言語表現は、相手の「聞き手」としての幼児には充分伝わらなかった。つまり、幼児同志のコミュニケーションの場合、他人の言語表現を手がかりにしたのでは正確に decoding することがかなり困難であった。③ところが、幼児であっても、成人が encoding した言語表現を手がかりにさせると、その decoding はかなり適切になされた。④さらに、当然のことながら、自分自身の言語表現を手がかりした場合も、幼児の decoding はかなり適切であった。以上の結果によると、幼児の場合、decoding そのもの (いかえれば、理解という情報処理) の能力は、幼児なりにあるのだが、それに反して、encoding して相手にコミュニケーションする能力に問題があると考えられる。すなわち、一定の referent を言語表現する場合、幼児はいわば自己中心的になりがちで、他者の立場・要求・理解を考慮にいれにくい (つまり、「聞き手」としての他人の役割を取

り入れることができにくい)、と云うわけである。Piaget の “自己中心的な談話から “社会化、された談話へという発達のな見解、Mead の役割取得理論をふまえた Flavell の発達理解、Werner & Kaplan の “自己のための談話 (inner speech)” と “他者のための談話 (external speech)” という観点から眺めてみると、この結果は興味深い事実を含んでいる。

さらに、Glucksberg & Krauss (1967) は、「話し手」・「聞き手」の相互的なかわりを詳細に検討するため、幼児、1年生、3年生、5年生、9年生、および成人を被験者にし、「話し手」・「聞き手」の組合せを次の3条件に変化させて実験を行なった。①「話し手」・「聞き手」のペアとして、同年令者同志を組み合わせる。②「話し手」のほうは一貫して幼児に固定され、「聞き手」が同年令の幼児の場合、異年令の3年生、5年生の場合というように変えられる。③「聞き手」は一貫して成人に固定され、「話し手」のほうは同年令の成人の場合、異年令の幼児、1年生、3年生、5年生の場合というように変えられる。この条件の場合には、一定の試行ブロックごとに、相手 (「話し手」) の言語表現の後に、「聞き手」である成人によって、“OK!!”、“わからない”、“もっと言って下さい”などのフィード・バックが与えられた。実験の素材と手続きは、前の Glucksberg らの研究 (1966) とほぼ同一であった。このような実験の結果、次の点が明らかにされた。まず、decoding accuracy について検討すると、①の条件、すなわち同年令者同志がペアにされた場合は、試行回数が増えるにつれて、ペアの年令水準に応じて正反応率 (mean percent correct) が増大し、また、②の条件、すなわち、「聞き手」の年令が変えられた場合は、たとえ幼児からの言語表現 (reference phrase) を手がかりにしている、「聞き手」の年令が高くなるにつれて、試行回数が増加とともに、誤反応 (mean errors) が減少した。次に、「聞き手」のフィード・バックに応じて、フィード・バック

ク後の「話し手」の言語表現(reference phrase)がどう変わるかを調べてみると(③条件)、「話し手」が成人の場合は、フィード・バックに応じて、その後、自己の言語表現を新しく変えたり(new description)、多少修正をほどこしたり(modified description)する者が多かったのにくらべ、年少の「話し手」ほど、フィード・バックによるこのような言語表現の変化は生じにくく、単なる繰返し(repeated description)や沈黙(silence)の率が相対的に高くなった。こうして、年令とともに、social editingが増大する傾向が示された。

Krauss & Glucksberg (1969) は、幼児、1年生、3年生、5年生の児童を被験者にし、上述の実験とほぼ同様の手続を用いて確認実験を行なった。その結果、同年令者同志のペアを組んだ場合、「子どもの年令」と「試行回数」との交互作用が統計的に有意であった。すなわち、試行回数が重なるにつれ、年長の子どものほど、decodingにおける誤反応数が有意に減少したわけである。また、子どもが言表した reference phrase を手がかりにして成人が decoding を行なった場合、成人の decoding accuracy は reference phrase を産出した子どもの年令が高くなるにつれて増大した。

以上の諸研究によって、「聞き手」からのフィード・バック(とくにネガティブ)に応じて適切にメッセージを再構成・再コード化する「話し手」の能力は年令とともに増大する、という事実が明らかにされたわけであるが、この解釈をめぐるのは、role-takingによる調整的コミュニケーションの能力の発達ということのほか、Cohen & Klein (1968)も指摘するように、「話し手」のレパートリーの問題も考慮されなくてはならない。Peterson, Danner, & Flavell (1972) は、この点に注意を払い、とくに、レパートリーの影響を少くするため、あらかじめ実験前の session において被験児がいろいろ異なる仕方で素材を言表し得るような機会を設定して実験を行なった。この実験では、言

語表現の egocentric—nonegocentric という質的側面よりも、情報に対する「聞き手」の要求を「話し手」が如何に認知し得るか、という点に焦点がしぼられた。被験児は4才児と7才児であり、素材としては多義的な無意味図形が用いられた。情報を求めようとする「聞き手」の要求のあらわし方のちがいが、ネガティブ・フィードバックは、次の3条件に分けて与えられた。① Facial condition: 「聞き手」の困惑した表情のみが示される。② Implicit condition: "わからない" という「聞き手」の言表のみで、それ以上のことについては何もふれられない。③ Explicit condition: "もう一度、その図形をよく見て下さい"、"ほかに何のように見えるでしょうか"、"それについてもっと話して下さい"などと、「聞き手」の要求が明確に示される。主要な結果は次の通りであった。まず、Facial condition と Explicit condition においては、年令差は見出されなかった。すなわち、4才児、7才児とも、Explicit condition に関しては、「聞き手」の明確な要求に応じて、「話し手」として情報を再構成して与えることが可能であった。しかし、Facial condition に関する限り、4才児、7才児とも、ほとんど有効にそれが行なわれなかった。年令差は、Implicit condition において明瞭に見出された。すなわち、たとえ事前にいろいろな表現の仕方を試みる機会が与えられた場合でも、明確な要求表示のともなわない言語的フィード・バックが「聞き手」から与えられたときには、4才児では、「話し手」として情報を再構成することは不可能に近かった。これに対して、7才児の大部分は、この implicit request をきちんと解釈し、情報をうまく再構成することができたのである。

c) 社会化過程との関連づけによる吟味

言語的コミュニケーションの発達の理解をさらに広い枠組の中でとらえるためには、子どもの生活史における社会化過程(socialization)との関連づけが必要になってくる。

Bernstein (1958, 1959, 1960, 1962 a, 1962

b, 1964, 1971, 1973) は、社会階層による(すなわち、イギリスの中流階級と下層階級との家庭における)言語的な教示のあり方のちがいが、および、それが子どもの社会化に及ぼす影響に着目した。彼によると、社会的・教育的・経済的な差異をもたらす行動様式は極めて初期に子どもの中につくり上げられる。しかも、このような社会化過程を導く主要なモメントは、母親と子ども間のコミュニケーションの様式の中にあるという。彼は、この場合、2つのコミュニケーション様式に分け、ひとつを「制限されたコード(restricted code)」、他方を「洗練されたコード(elaborated code)」と名づけた。「制限されたコード」の主要な機能は、具体的な形で対人関係を直接的に(いわば、命令調で)統制することであり、したがって、また、発話者の体験を表現するにあたっては、言語外のチャンネル(extraverbal channels)に多く依存し、言語表現は洗練されないままにとどまる。すなわち、語いの範囲の狭さ、限定された不正確な構文の使用など、言語表現は極度に圧縮され、ステロタイプ化され、細かなニュアンスや明確さを欠いたものになる。これに対して、「洗練されたコード」の主要な機能は、知識・思考内容・意味を、特定の状況に適合させつつ明確にコミュニケーションすることであり、したがって、発話者の体験を表現するにあたっては、言語外のチャンネル(paralinguistic and nonverbal channel)よりも、主として、言語的チャンネルそのものが有効に用いられる。すなわち、語いの範囲の広さ、さまざまな変化に富んだ正しい構文の使用など、その言語表現には、論理的な洗練さと同時に、微妙なニュアンスを豊かに含んだ个性的でユニークな表現上のみがきと工夫がともなわれる。Bersteinによると、より高い階層(上流あるいは中産階級)の家庭の子どもは幼いうちから両方のコードに接しており、とくに、必要に応じて「洗練されたコード」を自発的に用いるようになっていくが、低い階層の子どもは、家庭で主に「制限されたコード」し

か用いられないため、自己の言語表現をそれ以上のものに仕上げるための動機づけも強化も与えられない、という。こうした見解を支持するような研究は、すでにMilner(1951)によって着手されていたが、Berstein以後、この問題に関連する論究や実証研究はイギリス以外にも多くみられるようになった。(たとえば、Hess & Shipman, 1965; Hess & Bear, 1968; Blank & Solomon, 1969; Ervin-Tripp, 1969; Miller & McNeill, 1969; Fishman, 1972, 邦訳1974; Graumann, 1972; Reuchlin, 1972; Esperet, 1972~1973, Simon et al., 1973; もちろん、中にはHouston(1970)のような比判的研究もある)。

このように、社会階層(あるいは社会的・文化的な社会化の条件)と言語および認知の発達過程とを関連づける研究テーマは最近の大きなトピックのひとつであるが、この問題に関する詳細な論議は別な機会にゆずり、ここでは、referential communication という本稿の文脈にある程度そったAlvy(1973)の研究について略述する。

一般に「話し手」は、「聞き手」の諸特性(cognitive and emotional characteristics)に関する何らかの仮定(推測)に基づいて話しかけることが多い。Alvyは、この種のspoken communicationを“Listener Adapted Communication(LAC)”と名づけ、とくに、次のような仮説を検証するため実験を企画した。仮説:①いずれの社会階層の子どもでも、年令の上昇とともに、LACの頻度は増大し、その質は向上するであろう。②ただし、低い階層の子どものLACの頻度と質は、より高い階層(中・上流階級)の子どもほどには上昇しないであろう。③LACの頻度は、男児よりも女児において高くなるであろう。被験者としては、New York州の北部地方にある小学校から、6才児60名、9才児60名、12才児60名、計180名が選ばれた。なお、各年令群は、一定の規準(父親の職業、家庭の収入、親の最終学歴など)によって、上・中・下の社会階層の下位群(20名ずつ)に

分けられ、さらに、各 20 名は、男女 10 名ずつによって構成された。素材は、表情や姿勢によって、emotional な状態の描き方が異なる 6 ペアの人物画であった。課題は、Multisituational task とよばれ、6つのコミュニケーション状況の各々において、対にされた各人物画を「聞き手」とみだてて、それに話しかけることであった。(たとえば、Situation—2 の課題は、emotional な状態の異なる男の人物画のそれぞれ——片方は happy, 他方は angry——に向けて、その男の裏庭にころがり込んだボールを返してもらうために、話しかけるという課題であった。)なお、すべてのコミュニケーション課題が終了した後、本当に子どもが相手(人物画)の状態のちがいに気づき、それに合わせてコミュニケーションを変化させたかどうかをチェックするため、若干の確認質問(inquiry)がなされた。この実験の結果、上に述べた仮説はすべて支持された。

d) 実験的訓練の効果に関する吟味

適切なコミュニケーションの達成のためには、「話し手」は、相手(「聞き手」)の役割を(仮定的に)取り入れ、相手の要求を理解し、相手の立場・観点・パースペクティブを考慮に入れていく必要がある、同時に、そうすることによって、目的に応じて言語という表現媒体そのものに、より一層のみがきをかけていく必要もある。このようなコミュニケーションの能力は、確かに、環境と個体との相互作用という広い意味での発達過程の中で、漸次育まれていくものである。しかし、それは決して期して待つべきことを意味するのではなく、むしろ、ある意味において、積極的な教育的働きかけ(介入・訓練)の必要性をも示唆している。このような意味合いから、近年、言語ことにコミュニケーションの効果的発達を促進させようとする試みがいろいろ提出されている(たとえば、文化的阻隔児(culturally deprived or disadvantaged child)に対する一連の補償教育のひとつがそれである)。ここでは、まだ数少ないながらも、とくに

referential communication との関連づけで行なわれた実験的な training の試みを紹介しておこう。

Fry (1966) は、11~12 才児に、短期間(3週間)の実験的 training を施し、その前後になされたテスト・バッテリーの結果から、この training の効果を判定した。training における課題様式は referential communication の手続きに近いもので、素材も、一連の多義的な幾何学図形が用いられた。training では、「話し手」も「聞き手」もできるだけ相手からの反応やフィード・バックに注意を向け、それによって自分のコミュニケーションを調整することが求められた。統制群のほか、実験群としては、「話し手」の役割のみ訓練される群、「聞き手」の役割のみ訓練される群、両方の役割の訓練を受ける群の 3 種が設定された。その結果、training と類似の場面においては、確かにコミュニケーション活動の促進がみられたが、それ以上のより一般的な training の効果は検証されなかった。その後の彼の研究(1969)においても、結果はほぼ同じであった。

しかしながら、Shantz & Wilson(1972)は、7 才児を被験者にして、類似の実験状況を通して training を試み、referential communication における有意な改善を報告した。彼らは、Fry の実験に比べ明瞭な成果を収めた理由として素材や手続きの適切さ、および実験(訓練)中の被験者の interaction 体験の増大などが、より有利に働いたことをあげている。

ところで、これらの communication skills の改善は、さらに、もっと一般的な社会的適応能力の発達とも関連するであろう。この予想を裏づけるため、Chandler, Greenspan, & Baranboim(1974)は、以前の研究(Chandler, 1973)をふまえ、次のような実験を展開した。

すなわち、実験は、以下の 4 つの phases にしたがって順次なされた。① assessment と被験児の決定：学校や家庭において情緒的障害のみられる子ども達に一定の screening test が施

行され、その結果、とくに、role-taking と referential communication skill が乏しいと判断され、しかも、一般に慢性的な適応上の問題をも有していると思われる児童 48 名(9~11才, 平均年齢 11 才)が被験児としてえらばれた。

② training: 被験児は、次の 3 群のいずれかにランダムにふりわけられた。(a)role-taking の訓練を受ける群(サイコ・ドラマやビデオ・フィルムの作成を媒介にして、1 週間 2 時間、計 10 週間の training が行われる)。(b)referential communication の訓練を受ける群(Shantz & Wilson (1972) によって使用されたものと同様の communication game を通じて、1 週間 2 時間、計 10 週間の training が行われる)。(c)control 群(何ら訓練を受けないし、また、研究者との接触もない)。

③ reevaluation: pre-test としての assessment に対応して、類似の post-test が training 直後に施行された。

④ follow-up: さらに 12 ヶ月後、学校のスタッフや専門家によって、被験児達の日常生活における行動が観察評定された。この実験の結果、次のことが明らかにされた。

① communication game の training を受けた群は、とくに referential communication skills において有意な改善を示した。

② role-taking の training を受けた群、communication game の training を受けた群は双方とも、role-taking の能力において有意な改善を示し、さらに 12 ヶ月後の follow-up においても、一般的な社会的適応上の改善を示した。なお、communication game の training の効果が顕著であった理由として、次の点が指摘された。その第 1 は、role-taking の training では extralinguistic な手がかりもかなり併用されたのに対して、communication game の training の場合、まさに言語的表現がもっぱら重点的に用いられたという点、第 2 は、role-taking の過程の上に referential communication 過程が構築されるであろう、というようなコミュニケーション過程における一種の hierarchical な構造が想定され得る点である。

III

以上、referential communication をめぐる最近の研究動向について一通りの概観がなされた。上に述べた諸研究のほかにも、わが国においても、発達の見地からの研究がいくつかみられる(たとえば、最近の教育心理学会・日本心理学会の発表論文集など参照)。しかし、紙数の関係上、今、これらの研究について言及する余裕を筆者は持たない。したがって、今後この種の研究を進展させるにあたって留意すべきと思われる事項のみを、以下、極く簡略に記しておく。

①「自分のためのコード化」と「他人のためのコード化」の問題: 「内言」・「外言」をめぐる上述の所論に加え、当然、Vygotsky (英訳 1962, 邦訳 1962) の見解をも含め、認識の形成・発展という広い文脈からの検討が必要となるであろう。

②また、先に述べた Rosenberg & Cohen のモデルは、とくに「聞き手」の decoding process に関して、Rommetveit (1968, 1972) や Carswell ら (1971) による meaning process あるいは、information processing の視点をふまえ、再検討・修正される必要があろう。

③「表出」と「表現」とのかかわり: Kirchoff (1965) によってある程度コミュニケーション論的考察がなされているとはいえ、従来の Ausdruckspsychologie の研究領域は、「表出」的現象に片寄りがちであった。referential communication の研究成果を媒介にして、あらためて「表現心理学」の主題を問うなおす試みがなされねばならない。

④単なるチャンネルの相違にとどまらず、状況の共時性・通時性、メッセージの客体化・対象化の水準、extralinguistic な表現メディアの使用水準、自己や他者へのかかわりの深さなどに関連して、「話すこと」・「書くこと」へのアプローチを、今後一層深めていく必要があろう。

⑤これらの諸検討は、ある意味において、「言語心理学」と「社会心理学」の古くて新しい接点を再び確認する作業となるであろう。

引用文献

- 1 Alkire, A. A., Collum, M. E., Kaswan, J. & Love, L. R. (1968) Information exchange and accuracy of verbal communication under social power conditions. *J. pers. soc. Psychol.*, 9, 301-308.
- 2 Alvy, K. T. (1973) The development of listener adapted communications in grade-school children from different social-class backgrounds. *Genet. Psychol. Monogr.*, 87, 33-104.
- 3 Bernstein, B. (1958) Some sociological determinants of perception. *Brit. J. Sociol.*, 9, 159-174.
- 4 Bernstein, B. (1959) A public language: some sociological implications of a linguistic form. *Brit. J. Sociol.*, 10, 311-326.
- 5 Bernstein, B. (1960) Language and social class. *Brit. J. Sociol.*, 11, 271-276.
- 6 Bernstein, B. (1962 a) Linguistic codes, hesitation phenomena and intelligence. *Language and Speech*, 5, 31-46
- 7 Bernstein, B. (1962 b) Social class, linguistic codes and grammatical elements. *Language and Speech*, 5, 221-240.
- 8 Bernstein, B. (1964) Elaborated and restricted codes: their social origins and some consequences. *Amer. Anthropol.*, 66, 55-69.
- 9 Bernstein, B. (1971) *Class, codes and control. Vol. 1. Theoretical studies towards a sociology of language.* Routledge & Kegan Paul.
- 10 Bernstein, B. (ed.) (1973) *Class, codes and control. Vol. 2. Applied studies towards a sociology of language.* Routledge & Kegan Paul.
- 11 Blank, M. & Solomon, F. (1969) How shall the disadvantaged child be taught? *Child Developm.*, 40, 47-61.
- 12 Brown, R. & Lenneberg, E. H. (1954) A study in language and cognition. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 49, 454-462.
- 13 Carswell, E. A. & Rommetveit, R. (eds.) (1971) *Social contexts of messages.* Academic Press.
- 14 Chandler, M. J. (1973) Egocentrism and antisocial behavior: the assessment and training of social perspective-taking skills. *Developm. Psychol.*, 9, 326-332.
- 15 Chandler, M. J., Greenspan, S. & Barenboim, C. (1974) Assessment and training of role-taking and referential communication skills in institutionalized emotionally disturbed children. *Developm. Psychol.*, 10, 546-553.
- 16 Cohen, A. R. (1961) Cognitive tuning as a factor affecting impression formation. *J. pers.*, 29, 235-245.
- 17 Cohen, B. D. & Klein, J. F. (1968) Referent communication in school age children. *Child Developm.*, 39, 597-609.
- 18 Danks, J. H. (1970) Encoding of novel figure for communication and memory. *Cognitive Psychol.*, 1, 179-191.
- 19 Ervin-Tripp, S. M. (1969) Sociolinguistics. In Berkovitz, L. (ed.) *Advances in experimental social psychology.* Academic Press, 91-165.
- 20 Esperet, E. (1972-1973) Liaison entre le langage écrit d'élèves de terminales et certaines caractéristiques de leur milieu social d'origine. *Bull. Psychol.*, No. 304, Tom. XXVI, 5-9, 482-493.
- 21 Fishman, J. A. (1972) *The sociology of language.* Newbury House. (湯川恭敏訳, 1974, 言語社会学入門, 大修館書店)
- 22 Fry, C. L. (1966) Training children to communicate to listeners. *Child Developm.*, 37, 675-685.
- 23 Fry, C. L. (1969) Training children to communicate to listeners who have varying listener requirements. *J. genet. Psychol.*, 114, 153-166.
- 24 Glucksberg, S. & Krauss, R. M. (1967) What do people say after they have learned to talk? *Studies of the development of referential communication. Merrill-Palmer Quart.*, 13, 309-316.
- 25 Glucksberg, S., Krauss, R. M. & Weisberg, R. (1966) Referential communication in nursery school children: method and some preliminary findings. *J. exp. child Psychol.*, 3, 333-342.
- 26 Graumann, C. F. (1972) Interaktion und Kommunikation. In Gottschaldt, K., Lersch, Ph., Sander, F. u. Thomae, H. (eds.) *Handbuch der Psychologie, 7. Band. 2. Halb. : Forschungsbereiche.* Verl. f. Psychol., 1109-1262.
- 27 波多野完治・辻正三・滝沢武久 (1960) コミュニケーション行動の発達の研究(1), 東京大学新聞研究所紀要, No. 9. 57-82.
- 28 波多野完治・辻正三・滝沢武久 (1962) コミュニケーション行動の発達の研究(2), 東京大学新聞研究所紀要, No. 11. 15-27.
- 29 Hess, R. D. & Bear, R. M. (eds.) (1968) *Early education: Current theory, research, and action.* Aldine Pub.
- 30 Hess, R. D. & Shipman, V. C. (1965) Early experience and the socialization of cognitive modes in children. *Child Developm.*, 36, 869-886.
- 31 Houston, S.H. (1970) A reexamination of some assumptions about the language of the disadvantaged child. *Child Developm.*, 41, 947-963.
- 32 いぬいたかし・うどう (かまやち) かずこ (1965) 形象コミュニケーション——視覚伝達の基礎理論——, 誠信書房
- 33 Kaplan, B. (1961) An approach to the problem of symbolic representation: nonverbal and verbal. *J. comm.*, 11, 52-62.
- 34 Kaplan, E. (1952) An experimental study on inner speech as contrasted with external speech. Unpublished master's thesis. Clark Univ.
- 35 城戸幡太郎 (1970) 文化心理学の探究, 国土社
- 36 Kirchoff, R. (1965) Grundfragen der Ausdruckspsychologie. In Gottschaldt, K., Lersch, Ph., Sander, F. u. Thomae, H. (eds.) *Handbuch der Psychologie, 5. Band. : Ausdruckspsychologie.* Verl. f. Psychol., 117-219.
- 37 国立国語研究所 (1964) 小学生の言語能力の発達, 明治図書
- 38 Krauss, R. M. & Glucksberg, S. (1969) The development of communication: competence as a function of age. *Child Developm.*, 40, 255-266.
- 39 Krauss, R. M., Vivekananthan, P. S. & Weinheimer, S. (1968) "Inner speech" and "external speech": characteristics and communication effectiveness of socially and nonsocially encoded messages. *J. pers. soc. Psychol.*, 9, 295-300.
- 40 Krauss, R. M. & Weinheimer, S. (1964) Changes in reference phrases as a function of frequency of usage in social interaction: a preliminary study. *Psychon. Sci.*, 1, 113-114.
- 41 Krauss, R. M. & Weinheimer, S. (1966) Concurrent feedback, confirmation, and the encoding of referents in verbal communication. *J. pers. soc. Psychol.*, 4, 343-346.
- 42 Krauss, R. M. & Weinheimer, S. (1967) Effect of referent similarity and communication mode on verbal encoding. *J. verb. Learn. varb. Behav.*, 6, 359-363.

- 43 黒田正典 (1959) 人生の知恵, 協同出版
- 44 黒田正典 (1968) 新ジェームス・ランゲ説ということ, 東北大学教養部報 (4月1日付)
- 45 Manis, M. & van Rooijen, L. (1973) Integrating the information in referential messages. In Solso, R. L. (ed.) *Contemporary issues in cognitive psychology: The Loyola symposium*. V. H. Winston. 251—276.
- 46 Mead, G. H. (1934) *Mind, self and society*. Univ. Chicago Press.
- 47 Merleau-Ponty, M. (1960) *Signes*. Librairie Gallimard. (竹内・海老板・栗津・木田・滝浦訳, 1969, シーニュ I, みすず書房)
- 48 Miller, G. A. & McNeill, D. (1969) Psycholinguistics. In Lindzey, G. & Aronson, E. (eds.) *Handbook of social psychology*. 2nd ed. Addison-Wesley. 666—794.
- 49 Milner, E. (1951) A study of the relationship between reading readiness in grade-one school children and parent-child interaction. *Child Developm.*, 22, 95—112.
- 50 Moscovici, S. (1967) Communication process and the properties of language. In Berkowitz, L. (ed.) *Advances in experimental social psychology*. Vol. 3. Academic Press. 225—270.
- 51 Moscovici, S. (ed.) (1972) *The psychosociology of language*. Markham Pub. (Preface)
- 52 Peterson, C. L., Danner, F. W. & Flavell, J. H. (1972) Developmental changes in children's response to three indications of communicative failure. *Child Developm.*, 43, 1463—1468.
- 53 Piaget, J. (1923, 改訂3版 1948) *Le langage et la pensée chez l'enfant*. Geneve. (大伴茂訳, 1954, 臨床児童心理学, 同文書院)
- 54 Reuchlin, M. (1972) Les facteurs socio-économiques du développement cognitif. In Duyckaerts, F., Hindley, C. B., Lézine, I., Reuchlin, M. et Zempléni, A. (eds.) *Milieu et développement*. P. U. F., 69—136.
- 55 Rommetveit, R. (1968) Words, meanings, and messages: Theory and experiments in psycholinguistics. Academic Press.
- 56 Rommetveit, R. (1972) Language games, syntactic structures and hermeneutics: In search of a preface to a conceptual framework for research on language and human communication. In Israel, J. & Tajfel, H. (eds.) *The context of social psychology*. Academic Press. 212—257.
- 57 Rosenberg, S. & Cohen, B. D. (1964) Speakers' and listeners' processes in a word-communication task. *Science*, 145, 1201—1203.
- 58 Rosenberg, S. & Cohen, B. D. (1966) Referential processes of speakers and listeners. *Psychol. Rev.*, 73, 208—231.
- 59 佐藤功 (1966) 認知的体制化と言語化過程をめぐる問題 その1. 東北学院大学一般教育論集, No. 48, 141—177.
- 60 佐藤功 (1967 a) 人間存在と知覚体験. 谷口隆之助・早坂泰次郎・佐藤功 (共著) 人間存在の心理学, 川島書店. 59—166.
- 61 佐藤功 (1967 b) 思考. 北村晴朗 (編) 要説心理学, 昭学社, 172—204.
- 62 佐藤功 (1968) 社会的認知. 館逸雄・佐藤寿郎 (編) 社会心理学. 協同出版. 35—54.
- 63 佐藤功 (1970 a) コミュニケーション過程と認知的体制化 I: cognitive tuning の検討. 心理学研究, 第 41 巻 4 号, 173—181.
- 64 佐藤功 (1970 b) コミュニケーション過程と送り手の態度の認知: cognitive tuning との関連. 年報社会心理学, 第 11 号, 231—246.
- 65 佐藤功 (1970 c) コミュニケーション過程とメッセージの受容度: cognitive tuning 現象との関連. 大阪産業大学論集, 第 30 号, 1—10
- 66 佐藤功 (1972) 言語と情報. 小口忠彦・早坂泰次郎 (編著) 動機づけの心理学. 明治図書, 162—177
- 67 佐藤功 (1973) 心と心のふれあい: 人間学的なひとつの問として. 産業訓練, 第 19 巻 213 号, 14—20.
- 68 Shantz, C. U. & Wilson, K. E. (1972) Training communication skills in young children. *Child Developm.*, 43, 693—698.
- 69 Simon, J., Bataille, M., Dombre, F. et Laterrasse, C. (1973) Langage et classes sociales: attentes de mères de milieux socio-économiques différents quant au langage de leurs enfants. *J. Psychol. norm. pathol.*, 70e Année. Nos. 1-2, 175—188.
- 70 Slepian, H. (1959) A developmental study of inner vs. external speech in normals and schizophrenics. Unpublished doctor's dissertation. Clark Univ.
- 71 Vygotsky, L. S. (英訳 1962) *Thought and language*. Wiley. (柴田義松訳, 1962, 思考と言語 (上・下), 明治図書)
- 72 Werner, H. & Kaplan, B. (1963) *Symbol formation: An organismic-developmental approach to language and the expression of thought*. Wiley. (柿崎裕一監訳, 1974. シンボルの形成: 言葉と表現への有機一発達論的アプローチ, ミネルヴァ書房)
- 73 Zajonc, R. B. (1960) The process of cognitive tuning in communication. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 61, 159—167.

Review of Studies in Referential Communication

Isao SATO

In this review, several considerations were given to the following issues; (1) preliminary studies in referential communication, and (2) some approaches to such specific problems in this research area as (a) application of Rosenberg's model, (b) aspects of developmental changes, (c) social-class differences and (d) effects of experimental training.